

2018年11月11日(日)朝10:10～  
11月第2共同礼拝式説教

主の降誕前第7・役員会  
日本アライアンス庄原基督教会

## 説教題：神信仰による神の義

聖書：ローマ4章1～5節＜口語訳＞

新約聖書237頁

ローマ4章1～5節＜新共同訳＞

新約聖書278頁

ローマ4章1～5節＜新改訳第3版＞

新約聖書294頁

ローマ4章1～5節＜塚本訳＞

新約聖書466頁

(全節を朗読)

主題：主イエス様から賜った聖霊の導き  
によって主の弟子たちは、主の名  
による神の罪からの救いを宣べ  
伝えたように、私たちも、福音を  
伝えたい。

序論；

◇**ローマ書**は、**神による人間の罪からの救い**が、**どのようなにもたらされるのか**を**使徒パウロ**が語っている書簡です。

⇒ケンクレヤのフィベが商用でローマに赴くことを聞いた**パウロ**が、コリントで**ローマ書**を認め、彼に託したものとされています。

⇒**パウロ自身**は、コリントから**ローマ**へ伝道に行きたかったようですが、諸教会からの献金をエルサレム教会に届ける役目を担っていたので、エルサレム帰還を優先し、その後で**ローマ**へ伝道旅行をと思ったようです。

⇒**パウロの計画**の通りではありませんでしたが、この第3回の伝道旅行が終わった後、最後の旅は、捕囚の身ながら**ローマ**へと導かれるのです。

◇**ローマ書4章1～8節**は、**ローマ書1章18節～3章20節**で、パウロは人間本質的罪を問題にしたのを受けて、**神の義、殊に信仰者アブラハムの信仰の義**を扱っています。

◇**ローマ書4章1～5節**は、**神信仰による神の義は、神の恵み**であるとする箇所です。

本論；

◇本日は、**ローマ書4章1～5節**からの**使信**に心をとめます。

◆**ローマ4章1～5節**；**神の義**は、**神信仰**によることを**信仰の父祖アブラハム**が示したのです。

◇10月14日、ヨハネ1:1～5から「**神が偕に**」おられることを実現して下さった「**神であり、神の御子であるイエス・キリスト様**」を見ました。

◇10月21日、**黙示録21章1～8節**から**神が創造された人間の完成の姿**を見ました。

◇10月28日、**黙示録21章22～27節**から**罪によって崩れた生活を立て直された天の神の都における生活の基盤**を見ました。

◇11月4日、**I ペテロ3章20～27節**から**神がノアの箱舟によって示されたのは、「神への服従」**であることを見ました。

◇本日の**ローマ書4章1～5節**から「**アブラハムによる神信仰の義**」に目をとめます。

◆**アブラハムが義とされたのは信仰による**  
<1～8>

「1 それでは、わたし達(ユダヤ人の)肉の先祖

アブラハムが得たものは、どういうことになるのだろうか、(何も得なかったことになるではないか、とある人は言うかも知れない。

- 2 わたしは答える、)もし実際アブラハムが(りっぱな)行いによって義とされたのならば、(たしかに)誇る理由がある。しかし(誇ると言っても、人間に対してであって、)神に対してではない。
  - 3 では聖書は何と言っているか。『アブラハムは神を信じて、そのことが彼の義と見なされた』とある。(アブラハムが義とされたのは行いのゆえではなく、恩恵である。)
  - 4 いったい、仕事をする者に対しては、報酬は債務であって、恩恵とみなすべきではない。
  - 5 反対に、仕事をしない者、すなわち(善い行いは出来ずとも、信ずれば)どんな悪人でも義とするお方(神)を信ずる者に対しては、その信仰が義と見なされるのである。」とパウロは、「**神の義は、神への信仰によって、しかも、神の恵みによって与えられる**」ことを証しました。
- ◇「**神信仰による義**」をOA師は、強調しておられます。

⇒**創世記12:13**で、「**アブラム**」は、飢饉に直面し、避難したエジプトの地で、**妻サライ**を**妹**と偽っています。「**神信仰による神の義**」は、無効になったのか、**OA師**は問い、決して無効になることはない、**アブラハム自身**は弱く脆い人間なのだと語られます。

⇒これは、「**神信仰による義**」を与えられた「**アブラハム**」が(**創世記15:6**)、**神との永遠の契約のしるしに割礼**を受けるように**神**に命じられます(**創世記17:10~14**)。自分も我が子イシュマエルもすべてのしもべにも、割礼をさずけていますが、ユダヤ人たちの求めた行いの義の行為ではないかとの問いに対しても、**OA師**は、「**アブラハム**」は割礼を施す前に「**義**」と認められていることを強調しておられます。割礼が、彼らを「**義**」とするのではないのです。

⇒この後、**創世記20:2**でも、妻サラを「これは私の妹です」と偽って、ゲラルの王アビメレクに語っているのです。

◇**3~5節**；「『**アブラハムは神を信じて、そのことが彼の義と見なされた**』とある。(アブラ

ハムが義とされたのは 行いのゆえではなく、恩恵である。)(3)「仕事をしない者、すなわち(善い行いは出来ずとも、信ずれば)どんな悪人でも義とするお方(神)を信ずる者に対しては、その信仰が義と見なされるのである」(5)と、パウロは、「その信仰が義と見なされる」と語っています。

- ◇創世記12:1～4aはアブラハムが祝福の基となることを示しています。創世記15:6で彼は、その信仰を義と認められますが、「神の祝福の基」となることが、示されていたのです。
- ⇒常に**神信仰**に立っている人が「**神の祝福の基**」とされるのではなく、常に**神の恵み**が先行していることを忘れてはなりません。
- ⇒私たちは、「**神の御国の完成された人間と生活**」を望みつつ、「**現実の罪の誘惑と戦い**」つつ、「**神の御霊の呻くような祈り**」に支えられて、「**神信仰の義**」に生きたいと願います。
- ⇒何より心がけたいと願いますのは、「**神による信仰の義**」に相応しくない生活をしているから駄目だと決めつけないで、「**駄目の者**」だから「**神は恵み**」をもって生きて下さる。

## 結論；

◇1:17節；神は、その信仰を義とされます。

◇神の「義」は、神の前にその罪を告白した罪人に与えられます。それが、神の恵みです。

◇ローマ書は、神による人間の罪からの救いが、どのようにもたらされるのかを使徒パウロが語っている書簡です。

◇ローマ書4:1～5は、「アブラハムの行い」ではなく、「神信仰が神の義」と神によって認められたことを語っています。

⇒「アブラハム」は、「神信仰の義」を認められて後も、自分の妻を妹と偽りました。併し、「神が彼の神信仰を義と認められた」ことが無効になることはないのです。「神の認証」が確かなことで、「義とされた人間の自覚」が「神の認証」に先行することはないのです。

⇒駄目な脆い人間である私をあわれんで下さいと、日々祈り、何よりも、主が招いて下さる主日の礼拝、家庭での個人の礼拝・デボーションを大事にしましょう。

⇒神は、大小の試練とともに逃れの道を用意して下さるのですから。